

小6がシテ 本格能

京都の味方さん 31日大津で「土蜘蛛」

夏休みに伝統芸能に触れてもらおうと、能楽の人氣演目「土蜘蛛」が31日、大津市伝統芸能会館で上演される。シテ(主役)として土蜘蛛の精などを演じるのは、京都市の能楽師・味方玄さん(49)の三女で小学6年生の梓さん(11)。メインの役どころを子どもたちが演じる『子ども能』で、難しいと思われるがちな能楽を身近に感じてもらう。(西田大智)



父の味方玄さん(右)の指導で、蜘蛛の糸を飛ばす練習をする梓さん(大津市で)

物語は、鬼退治で知られる平安時代の武将・源頼光の武勇伝。ある夜、病に伏す頼光の前に謎の僧侶が訪れ、蜘蛛の糸を飛ばして襲いかかった。頼光が太刀を抜いて斬りかかると、僧侶は姿を消した。頼光の家来の武者たちが後を追いかけて、現れた土蜘蛛の精を退治する。土蜘蛛の精が舞台上で蜘蛛の糸を四方に飛ばす演出は迫力があり、見応えのある演目だ。

梓さんは、物心が付いた頃から見よう見まねで能楽を始め、3歳の時に「鞍馬天狗」の花見の稚児役で初舞台を踏んだ。子方(子役)としての舞台経験は豊富だが、シテを勤めるのは今回が3回目という。

「シテは、子方と違っていろいろやることが多いので、すごく緊張します」と梓さん。土蜘蛛も、玄さんの指導で練習を重ねてきた。本番用の蜘蛛の糸の小道具は子どももの手には大きく、梓さんは「思った通りのところ」に飛ばすこと

主な配役も児童「舞台身近に」

「舞台は、梓さんのほか、頼光とその家来役は片山峻佑君と浦部春仁君、頼光の侍女・胡蝶役は味方慧君、土蜘蛛の精と戦う武者の家来役は茂山竜正君と、主要な配役をいずれも小学生の子どもたちが勤める。笛や太鼓などの囃子方や、謡曲をうたう地謡などは大人の能楽師たちが支える。

当日は後見役として見守る玄さんは「子どもたちが出演するとはいえ、本格的な能の舞台と全く同じ。同年代の子どもたちが見ても動きが多く、面白いと思えるはず」と語る。

梓さんは「能は口で説明するのは難しいので、実際に舞台を見て少しでも興味をもってもらえたらうれしい」と意気込んでいます。

午後2時開演。能「土蜘蛛」の解説や囃子体験、仕舞「橋弁慶」などに続いて、上演する。入場料は一般1500円。3歳以上15歳以下は1000円。問い合わせは大津市伝統芸能会館(077・527・5236)へ。